

風姿花伝第三、問答条々 三 立合勝負の手立

問。申樂の勝負の立合の手^{たちあひ}
立^{だて}は如何。

答。これ肝要^{かんよう}也。先^{まづ}、能^{のう}
数^{かず}を持ちて、敵人^{てきじん}の能に^{のう}変^か
はりたる風体を、違^{ちが}へて為^す
べし。序^{じよにいふ}云、歌道^{かどう}を少^{すこ}し嗜^{たしな}

〔口訳〕 猿樂の立合（競演）に於て勝を得る
手段は、如何なる点にありませうか。

答。これは実に大切な事である。先
づ第一に、自分が演じ得る能数^{のうかず}を豊富
に持つて居て、相手の能とは趣きを違
へて、変つた風体の能を演ずるやうに
すべきである。この花伝書の序に、「歌
道を少し嗜むやうにせよ」と述べたの
は、この為である。即ち、能の作者と

めとは是也。^{これなり}これ芸能の作者^{べつ}別なれば、いかなる上手も心のまゝにならず、自作^{じさく}なれば、詞振^ふる舞^まい、案^{あん}の内^{うち}なり。されば、能^うを為^せん程^者の物の、知才^{ちさい}あらば、申^{まう}楽^{らく}を作^{つく}らん事易^{やす}かるべし。

それを演ずる者とが別人である時は、換言すれば他人の作つた能を演ずる時は、如何なる上手でも心のままに能をやることは出来ない。ところが、自分の作つた能を自分で演ずるとなると、文句についても振舞についても、全く自分の思ふままである。それで、能が舞へる程の者で、学才があるなら、能を作ることはいと容易なことであらう。この能が作れるといふことは、此の道に於ける生命ともいふべきものである。

これ此道^{いのち}の命也。

されば如何なる上手も、能^うを持^もたざらん為^{して}手^ては、一騎^き当^あ千ほどの人なりとも、軍陣^{ひやうぐん}にて兵具^{ひやうぐ}のなからん、是^{これ}をな^を同^{どう}じ。されば、手柄^{がら}の精^{せい}糲^{れい}、立合^{たちあ}に見^みゆべし。敵方^{てきがた}

かやうな訳であるから、たとひどんな上手な役者でも、自分の能を持たない役者は、あたかも、一騎当千ほどの勇士でも、戦場に出て武器の無いのと同様で、とても思ふ働きは出来るものではない。だから、その人が、立派な働きが出来るかまづい働きしか出来ないかは、この立合勝負（競演能）で一等よくあらはれるものだ。相手方の方で華やかな能を演じたならば、こちらには趣を変へて、閑かな能で、しかも

色めきたる能をすれば、閑しづかに模様変やうかはりて、詰め所どころのある能をすべし。かやうに、敵仁てきじんの申楽さるがくに変かへてすれば、いかに敵方の申楽さるがく善よけれども、さのみには負事まくることなし。若もし能よく出いで来くれば、勝かつ

どこかに一際人の心を惹きつけるヤマのあるやうな能をするが良い。かやうに相手方の能と趣を違へて演ずるならば、どんなに相手方の能が良くても、こちらが負ける事は無い。若しこちらの能がうまく出来れば、相手方に勝つことは必定であらう。

事ことは治定ぢぢやうなるべし。

然しかれば、申楽さるがくの当座たうざに於おいても、能に上中下の差別しやべつあるべし。本説ぜつたぎ正しく、珍めづらしきが、幽玄ゆうげんにて、面白おもしろき所あらんを、善よき能と申べし。よき能を、善よく為したら

かやうなわけで、実際に能を演ずる際に於ても、能に上中下の差別があるやうである。典拠出典が正しく、しかも珍しい曲で、その出来が幽玄で面白い所があるといったやうなのを、良い能（曲）といふべきである。かやうな良い能（曲）を良く演出して、しかもそれが成功したのを、演能の第一位とすべきであらう。能（曲）はそれほど上出来のものではないが、その本説のままに、疵の無いやうに演出したの

が、うまく成功したのを演能の第二位とすべきであらう。能（曲）は一向につまらないものだが、その本説の悪い所を却つて手掛りとして、骨を折つてうまく演じ生かしたのを演能の第三位と定める。

んが、しかも、出で来たら
んを、第一とすべし。能は
それ程になけれども、本説
の儘に、咎もなく、善く為
たらんが、出で来たらんを、
第二とすべし。能は似而非
能なれども、本説の悪き所

を、中々便りとして、骨を
折りて、よくしたるを、第
三とす。

此の段の中心は、立合勝負に勝つ手段を説くのが眼目であり、「能数を持ちて敵人の能に变りたる風体を違へて為べし」、「敵方色めきたる能をすれば、しづやに模様かはりて、つめ所のある能をすべし。かやうに

敵人の申樂にかへてすれば、如何に敵方の申樂善けれども、さのみに負くる事なし。若し能よくいできれば、勝つ事は治定なるべし」といふ条が、その中心である。その手段として、能を作る事の必要が説かれ、最後に「曲柄の善悪が演出価値に及ぼす影響」について説かれてゐるのである。

敵人の能と模様風体の変つた能を演ぜよといふ教訓は誠に面白い。同じ風体の能であれば、よほど後の演者がすぐれてゐなくては、勝目が前者に多いことは、心理学的に考へても明瞭である。見物の倦怠の感じ、先入主となる心理、これだけを考へても、後の者が損をする事は

明白である。模様が変れば、倦怠や先入主が安全に封じられ、又一面に、異趣のものであるから、見物人の批判が容易でない。そこに、少くとも、「負けない」だけの用意が出来てゐる。よく考へたものだと思ふ。能を作ることは、第一に自ら能を豊富に持つ結果となる。自分の演じ得る能が多くなければ、臨機応変に敵方の能と模様の変つたものを演ずることに支障が生じる。大きな店舗が各種の商品を豊富に具へて、如何なる客にも向くやうに準備するのと同じの理由である。第二の理由は、自作自演と、他人の作を演ずるのとの相異である。「自作ならば、言葉ふるまひ案の内なり」であるが、他人の作はさうは行かぬ。他人は、

自分がやるために作るので、他の者がやるのに好都合には作つてゐないからである。

「手柄の精糲立合に見ゆべし」といふ手柄といふ語の中には、演技も勿論入つて居るはゐるが、他人の能と趣の変つたものを演ずるとか、又能を作るなどといふ、心のはたらきをもこの中に含めて考へるが良いと思ふ。それでないと、この語が生きない。

最後の申樂の当座に於て、演能に上中下があるといふ評論は、結局、

良、能、（曲）を持つ事が、最大の演技価値を發揮する為には、大切な要件である事を物語つたものと考へられる。演者は同様に苦心して上手に演じて、その能が、さほど名曲でないものは第二位になり、能柄が悪ければ第三位におちるからである。これも立合勝負に於て敵人の能に勝つためには、是非心得てゐなくてはならない。その為には、本説の正しい且つ珍らしいものを以て、幽玄に且つ面白いやうに能作する事が必要となつて来る。従つて自ら能を作る力量があることが、立合勝負に勝を制する重大な役目をつとめる事も明白である。

